

解答例

問1 (100点)

私たちはしばしば「自然の猛威の前に人は無力だ」という類の言葉を耳にする
が、筆者は実のところ「科学」と「技術」によって自然の猛威から人間の命を救
うことは可能だと述べている。つまり、科学的知識を持っていることがいざとい
う時に身を守る力になるし、そうでなければ身を守る術がないという。「気持ち」
や感情だけで人を救うことはできないが、科学的にデータを分析し、そこから予
測を立て、次の手を打つことこそが人類の力なのであり、科学こそが自らの身に
降りかかる自然の驚異に対する防波堤になると考えている。

東日本大震災時の津波に際しても、「津波が来ても、防波堤があるから大丈夫」
という言葉ばかりを鵜呑みにし、そもそも「津波」とは何なのか、どういったメ
カニズムで安全を確保しているのか、何メートルの津波まで想定されているのか
といった「科学」に基づく「防災」が忘れられていたこと、あるいは軽視されて
いたことが、激甚な被害を生じさせた一因なのだと考えている。そしてそのよう
な観点から、科学から目を背けることは私たち自身の命を危険にさらすことな
のであり、それはつまり私たちにとっての不利益に他ならないと述べている。

(493字)

解答例

問 2 (200 点)

科学を避けて生きることは現代社会においては到底無理なことであり、もはや科学は好き嫌いで片づけられる次元のものではない。にもかかわらず、科学から目を背ける人が多い社会を筆者は危惧しているが、私もそのような筆者の意見に賛成である。なぜならば、本文にあるように、ある言葉やひとつの結論が生み出される過程を個々人が論理的・科学的に分析し、時にはその是非について評価をめぐらす自発的思考がなければ、人びとは言葉や結論のみをただ受動的・盲目的に受け入れるだけの言わば思考なきロボットになってしまうだろう。そのような思考なき大衆は、時として非科学的思考に陥り、あるいは扇動されるがままに社会を非科学的で合理性のない矛盾に満ちた方向に導いてしまう。そのような事例は私たちの先達が経験してきた世界中の事象が物語っており、枚挙にいとまがない。

例えば、最近では気候変動を含めた環境破壊問題が国際的課題として広く共有されており、2015年に国連総会で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)のひとつにも掲げられている。即ち、近代以降、地球上の生命にどのような結果をもたらすかの科学的分析がないまま無批判に推し進められてきた環境開発と利潤追求が、結果として私たちの未来に壊滅的状况をもたらしている。そしてその地球壊滅の危機がまさに今、待ったなしのところまで及んでおり、すんでのところで私たちの科学的思考が試されているのだ。

(592字)